

宮沢賢治研究 3

詩「白い鳥」に見られる宗教観と、
原風景としての安倍氏の興亡（白鳥伝説）

太 田 昌 孝

Masataka OTA

Studies in Humanities and Cultures

No. 3

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 3号
2005年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JANUARY 2005

宮沢賢治研究3

詩「白い鳥」に見られる宗教観と、原風景としての安倍氏の興亡（白鳥伝説）

太 田 昌 孝

要旨 本論は、1、詩「白い鳥」に見られる宮沢賢治の宗教観について、と、2、宮沢賢治作品の原風景としての安倍氏の興亡（白鳥伝説）とに分けられる。

1においては、大正11年11月の、妹宮沢トシの死を契機に賢治の宗教観（死後観）が如何に移したかを、詩「白い鳥」の作品分析を行うことにより明らかにした。それによると、「白い鳥」制作時（大正12年6月）における賢治は未だトシの死がもたらした喪失感から抜け出す気配はなく、『古事記』に描かれている倭建命の死後の姿に仮託する形でトシの死を受け止め、やがて賢治が立ち向かうことになる、「青森挽歌」での、トシの死の意味づけとは遠い境地にあることを考察した。

また、2においては、岩手に生まれ、岩手に生きた宮沢賢治の意識の原風景の中に刷り込まれていると考えられる、前九年の役における安倍一族の興亡の現実と賢治の作品への影響を、具体的な作品を提示することにより論考した。

宮沢賢治の作品（詩）に前九年の役（安倍氏の興亡）を明らかに表しているものは発見できなかったが、それをイメージの源泉にしていると考えられる作品は幾つか提示した。加えて、前九年の役に内包されている〈白鳥伝説〉と賢治詩との相関についても若干の考察を試みた。

キーワード：宗教観（の変遷）、（死者への）追慕、前九年の役、白鳥伝説、原風景

はじめに

これまで静岡学園短期大学（現静岡産業大学国際情報学部）研究報告第10号（1997年）に発表した「宮沢賢治研究1」において、大正3年の『漢和対照 妙法蓮華経』による、賢治と法華経との出会いから大正9年の国柱会入会、そして大正10年の東京への出奔に至る賢治の宗教心（信仰心）の変遷について論じた。

また、同じく、研究報告第11号（1998年）に発表した「宮沢賢治研究2」において、大正11年

の妹トシの死を契機に書かれた、「春と修羅」、「永訣の朝」、「無声慟哭」という作品の分析をもとに賢治の中で、宗教心がいかに変遷したかについて論じた。

今回はその二つの論考を踏まえて、実妹、宮沢トシの死（大正11年11月）を契機とし、創作中断期に書かれた詩「白い鳥」に着目し、その時期の宮沢賢治の宗教観について、作品解析を基本として論述したい。

尚、本論考においては、宮沢賢治の創作の原風景の一つとして重要だと考えられる、前九年の役における安倍氏の興亡（白鳥伝説）の跡を辿りながら、作品中に潜むと考えられるこれらの要素について、フィールドワークから得た視点からも論述を試みたい。

「白い鳥」における賢治の宗教観について

「白い鳥」は賢治にとって「無声慟哭」以来、七ヶ月振りの作品となる。この、長い沈黙は、妹トシの死（大正11年11月）が、直接の原因とされているが、生涯、多作で間断なく詩を書き続けた賢治にしてみれば、この空白の七ヶ月が持つ意味は重く、トシの死が賢治にもたらした心的外傷の強さが思い測られる。この七ヶ月について分銅惇作氏は、「妹の死後、まるで泉の水が涸れたように賢治の詩作は中断されていましたが、その長い沈黙の期間は、死者への追慕の念とともに、挫折のにがい思いに堪えた信仰の日々」だったと述べている。（1）

分銅氏が指摘するように〈信仰の本当の道づれ〉としてのトシを亡くした賢治の喪失感は尋常ではなく、トシの死の翌月には、花巻市内の「柳沢洋服店のガラスの前」でトシによく似た女性を見かけ、後にその体験を「青森挽歌三」（大正12年8月1日）において次のように描いている。

はげしいはげしい吹雪の中を
私は学校から坂を走って降りて来た。
まっ白になった柳沢洋服店のガラスの前
その藍いろの夕方の雪のけむりの中で
黒いマントの女の人に遭った。

（中略）

（何だ、うな、死んだなんて
いい位のごと云って
今ごろ此処ら歩てるな）

トシの死の数ヵ月後の雪の夕刻を舞台として書かれたこの作品には、賢治の深い喪失感に裏打ちされたビュアな心情が表現されている。肉親や近親者の死が自分の中で内面化できない時、誰しもが体験する〈死の肯定への楽観的拒否反応〉とでも呼ぶべき状態に晒されている賢治には、

トシの死の意味づけを行おうと志向する意思は存在しない。この作品の背景となった時期の賢治はトシの死を自分の中でいかに意味づけるかという問いを未だ自分の中に持ちえていない。賢治が、その難渋な自問自答の境に自らの身を投ずるには、あと半年程の時間を要し、大正12年8月の樺太旅行を待たねばなるまい。

さて、賢治が長い沈黙を破り、再び筆を執ったのは「風林」（大正12年6月3日）と、その翌日に書かれた、「白い鳥」においてである。「白い鳥」には以下のような記述がある。

二疋の大きな白い鳥が
鋭くかなしく啼きかはしながら
しめつた朝の日光を飛んでゐる
それはわたくしのいもうとだ
死んだわたくしのいもうとだ
兄が来たのであんなにかなしく啼いている
（それは一応まちがひだけれども
まつたくまちがひとは言はれない）

この作品において賢治が〈白い鳥〉を亡きトシに置き換えて叙述することについて、萩原昌好氏は、「アプリアリにそう感じたのではなく、それなりの根拠となる何かがあったのだと考えずにはいられない。」（2）という見解を述べているが、萩原氏の見解はこの箇所が続いて登場する日本武尊についての描写と関連付けて考えた場合には、正鵠を射ていると言える。

つまり、賢治の連想（死んだトシが白い鳥になった）には、下敷きとなる先行体験（根拠）があり、その根拠をもとにこの箇所の記述がなされたのである。しかし、忘れてならないのは、「白い鳥」の作品中に見られる賢治の宗教観（死後観）とも呼ぶべきものが、発展段階に有るものだという事実である。それは、後の〈デクノボー観〉に強く支えられ、輪廻の意味を彼なりに認識できた時期の、宗教観とは比較にならないほど、脆弱かつ、涙腺に寄り添ったものである。（賢治の輪廻認識については、中日新聞夕刊（3）に拙文「宮沢賢治の地平を行く上・下」が掲載されているので、ご一読願いたく思う。）

さて、ここで、『日本書紀』と『古事記』における〈白鳥〉についての記述を概観してみたい。

時に日本武尊、白鳥と化りたまひて、陵より出で、倭国を指して飛びたまふ。群臣等、因りて、其の棺を開きて視たてまつれば、明衣のみ空しく留りて、屍骨は無し。是に、使者を

遣して白鳥を追ひ尋めぬ。則ち倭の琴弾原に停れり。仍りて其の処に陵を造る。白鳥更飛びて河内に至りて、旧市邑に留る。亦其の処に陵を作る。故、時人、是の三の陵を号けて、白鳥陵と日ふ。

(『日本書紀』・ワイド版・岩波文庫)

是に白千鳥に化りて、天に翔りて浜に向ひて飛び行きぬ。爾に其の後及御子等、其の小竹の荇杣に足きり破れども、其の痛きをも忘れて哭きて追ひたまひき。此の時、歌日ひたまはく、

浅小竹原 腰なづむ 空は行かず 足よ行くな
とうたひたまひき。又其の海塩に入りて、なづみ行きましし時、歌日ひたまはく、
海処行けば 腰なづむ 大河原の 植ゑ草 海処は いさよふ
とうたひたまひき。又飛びて其の磯に居る時、歌日ひたまはく、
浜つ千鳥 浜よ行かず 磯伝ふ
とうたひたまひき。

(『古事記』・日本古典文学全集・小学館)

賢治の「白い鳥」においては、記紀のこの箇所に対応する叙述として次のような部分が挙げられる。

(日本武尊の新らしい御陵の前に
おきさきたちがうちふして嘆き
そこからたまたま千鳥が飛べば
それを尊のみたまとおもひ
芦に足をも傷つけながら
海べをしたつて行かれたのだ)

(『校本 宮沢賢治全集 第二巻』・筑摩書房)

一読して分かるように賢治の「白い鳥」の該当箇所は明らかに『古事記』の方をベースに書かれている。宮沢家程の家庭であれば、教養として賢治に記紀を読ませたであろうという推測は成り立つ。また、学校教育の場においても、賢治が町立花巻川口尋常高等小学校二年以降に用いられた「尋常小学読本」(国定Ⅰ期・明治37年施行)等において、記紀を学習していたという可能性も極めて高い。それでは何故、賢治は『日本書紀』ではなく『古事記』の方をモデルとして選

んだのであろうか。(賢治が記紀の双方に目を通していたことについては、萩原氏の、「日本武尊という呼称は日本書紀のもの」(2) という指摘も存在する。)

それについては幾つかの理由が考えられる。その一つとして鈴木三重吉の『古事記物語』を挙げること可能である。三重吉が『古事記物語』に収めた作品を「赤い鳥」に連載し始めたのは大正8年7月、当時、賢治は盛岡高等農林学校研究科に在籍中で、「猫」、「ラジウム」等の小品を書いていた。童話作家として出発を迎えていた賢治にとって「赤い鳥」は必読の書であったことは容易に想像できよう。賢治と「赤い鳥」との関係については、堀尾青史氏によると次のような記述がある。「やがて三重吉と直接交流がはじまったので、賢治の生原稿を送ってもらい、持っていった。それは『タネリはたしかにいちにち噛んでゐたやうだった』であった。(中略) 菊池が雑司ヶ谷の三重吉の家へゆくと、例によって一杯のみながら、『君、おれは忠君愛国派だからな、あんな原稿はロシアにでも持っていくんだなあ』といった。」(4) ここに出てくる「菊池」とは菊池武雄のことで、岩手県立福岡中学校教諭時代に『注文の多い料理店』の装丁と挿絵を担当した。後に上京し、小学校の図画教師となった。菊池に自分の原稿の掲載を依頼していることから、賢治がやはり「赤い鳥」を読み、そこに掲載されることを望んでいたことが窺われる。結局、掲載は適わなかったが、三重吉は「赤い鳥」誌上に『注文の多い料理店』の広告を掲載した。以上、賢治の「赤い鳥」への傾注ぶりからして、彼が『古事記物語』を読んでいたことは、ほぼ、確実である。その事実が、「白い鳥」執筆の際、どの程度、関わっていったかは想像の域を出ないが、『古事記』選択理由の一つの可能性として挙げておきたい。

また、こうした想像にも増して、確固たる理由として考えられるのは、『日本書紀』と『古事記』とを比較した場合の叙述内容の差異によるものではないだろうか。『日本書紀』では、日本武尊の父とされる景行天皇の悲嘆の言葉の後に、群卿百寮に命じて、伊勢の能煩野に埋葬したという記述が存在し、その後、白鳥へと化身した日本武尊の棺を開ける件が続く。賢治が根本的なわだかまりを感じたのはこの部分の叙述ではないだろうか。本文によると「明衣のみ空しく留りて、屍骨は無し。」とされ、日本武尊の肉体そのものまでが白鳥へと化身した事になっている。

それに比べ、『古事記』には、亡骸についての記述は全く無く、后や御子に弔われた日本武尊(倭建命)が八尋白千鳥になって、空高く飛翔したという記述が見られる。つまり、『古事記』においては、日本武尊(倭建命)の〈転生の実体〉が規定されず、「目に見えぬもの」(魂)の転生の姿が暗示的に語られている。(萩原浅男校注・訳の『古事記』(日本古典文学全集・小学館)によると、この箇所は、「倭建命の魂は大きな白鳥に姿を変えて」と現代語訳されている。)

つまり、『古事記』では、〈死者の魂が白鳥(白千鳥)になって飛翔した〉と記述されていると理解してよく、この記述は、当時の賢治がトシの死後の状況を思い描く際に、きわめて、相応しい形象に満ちている。やはり、トシを失った悲しみに強く打ちひしがれている賢治にとって、ト

シの肉体までもが仏教で言う〈畜生道〉に属する白鳥に化身したということを認めることはできなく、『古事記』のようにトシの魂が白鳥に姿を変えて（白鳥に運ばれて）天に飛翔したとするほうが、その叙述にかかる、オブラートのようなレトリック故に納得しやすかったのだろう。しかし、先にも述べたように、「白い鳥」制作時における賢治の宗教観（トシの死後の有り方についての見解）は後に彼が到達するステージとは程遠いものである。宮沢賢治の宗教的成熟（法華経理解）は、愛する肉親の死に対する比類なき喪失感と、それに連動する形で彼を襲うことになる〈理知のエポケー〉とでも呼ぶべき空白期を体験し、更に、死者の行方を法華経的に解釈する為の旅（樺太旅行・大正12年）を境に大きく前進することになる。しかし、この時の賢治は自己の生涯に渡って横たわる大きな難問の前に危うげに立ちながら、〈死者への追慕〉という段階を超えられずにいる。

「無声慟哭」において「どうかきれいな頬をして あたらしく天に生まれてくれ」と願った賢治の心情は大いに揺れ、眼前に現れた白い鳥に、亡き妹の姿を見てしまう程、悲嘆に打ちひしがれている。「二疋の白い鳥」を見て、瞬時に『古事記』の件を想起する賢治の思惟の深さはどれ位のものであろうか。この箇所について、萩原昌好氏は次のような解釈を試みている。

白い鳥は仏教上でいうなら「畜生道」に属するものであるし、神話の上では聖なる鳥である。この「魔」と「聖」とのはざまにあるのがトシである、と直感したからとっ嗟に「それはわたくしのいもうとだ」という表現になったのではないか。（2）

萩原氏の指摘によると賢治が作品「白い鳥」において〈二疋の大きな白い鳥〉をトシに見立てた思惟の深層には、仏教上からすれば「畜生道」に転生してしまった「魔」としてのトシと、神話の上から見ると「聖なる鳥」である白鳥へと化身した「聖」としてのトシが有り、彼女の魂はその二つの磁場に挟まれる形で存在していることになる。

この指摘は、「白い鳥」という作品世界だけに目を向けると、些かの疑問も残るが、萩原氏のように、この作品に続く「青森挽歌」にまで、読みの視点を拡大すると、卓見という他は無い。やはり賢治は、この時、既に、数ヶ月後の「青森挽歌」創作時において繰り返す試みることとなる〈トシの行方探しの旅〉の苦悶を予見しているのかもしれない。そうなると萩原氏の指摘は益々、重みを増してくる。（「青森挽歌」で賢治は様々な〈魔の声〉に打ち勝ち、トシがその死後、〈聖の道〉を辿り、やがて〈無常道〉に入ったことを認識するに至る。つまり、萩原氏は「白い鳥」と「青森挽歌」の連続性に着目していることになる。）

「無声慟哭」において「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが あかるくつめたい精進のみちからかなしくつかれてゐて 毒草や蛍光菌のくらい野原をただよふとき おま

へはひとりどこへ行こうとするのだ」という苦悶を歌い上げた賢治の迷いと、嘆きは、「白い鳥」においても解決されることは無い。トシが死後、どのような道途を辿り、何処に行き着いたのか。この時の賢治にはそれを強く自己認識する力は無く、萩原氏が指摘するように、「魔」と「聖」とのはざまにトシが存在しているのを「直感」することしかできない。『古事記』の「物語性」にトシの死後の姿を依託しようとする賢治が、自ら、疑問の前に凜として立つまでには、まだ、若干の日々を要するのである。

宮沢賢治作品の原風景としての安倍氏の興亡（白鳥伝説）

さてここで、賢治と鳥（白鳥）について、フィールドワークをもとに考察を試みることにした。天沢退二郎氏が様々な場で発言しているように、宮沢賢治にとって「鳥」は特別な存在として意識されている。

例えば、『銀河鉄道の夜』に登場する〈鳥を捕る人〉により捕獲される鳥（鶴・雁・鷺・白鳥）は作品の根底を流れる〈法華経観〉と深く関係していると思われる。また、『よだかの星』の主人公の「よだか」はその醜い外形故に、他の鳥から疎んじられ、寂しい生を送っているが、この主人公に賢治が背負わせた命題は殊の外重い。（私は「よだか」について、それは賢治により化身させられた存在であり、その元の姿は「常不軽菩薩」（5）であると考えており、賢治晩年の「デクノボー精神」と深く関わりがあると考えている。）

宮沢賢治に鳥（白鳥）に対する、特別な意識を想起せしめた、要素の一つとして考えられるものは、賢治の故郷、岩手県を中心に繰り広げられた、前九年の役における安倍氏の興亡と、それに潜む〈白鳥伝説〉でなかろうか。

東北地方と「白鳥伝説」については、谷川健一氏に以下のような指摘がある。

白鳥は古くから日本人の靈魂のかたどりとみなされてきた。白鳥に関する信仰や伝説ははるか南東の八重山にまで及んでいるが、とりわけ、東北地方に強烈であり、中でも宮城県南部の荊田郡や柴田郡に集中している。（6）

谷川氏が指摘するように、〈白鳥伝説〉は日本全国に散在しており、また、それに伴う「白鳥」という地名も枚挙に暇がないほどである。また「白鳥伝説」は、日本列島に飛来するオオハクチョウやコハクチョウの故郷でもある、シベリア地方にも多く伝えられている。先の谷川氏の指摘によると、バイカル湖のほとりのブリヤート族の白鳥信仰は、その偏執性において、荊田郡や柴田郡のものと酷似しており、「東北地方における「白鳥伝説」の起源の深さを推察させるのに足りるものである。」（7）という。

さて、同じく東北にあって、荊田郡や柴田郡に劣らないほど、「白鳥伝説」と密接な関連を持つのが岩手県の胆沢郡を中心した地域である。その中でも特に注目されるのは、〈白鳥八郎伝説〉の中心地、現在の岩手県胆沢郡前沢町字白鳥館と呼ばれる地区である。

白鳥館は、その発掘を伝える「岩手日日ニュース 水沢・江刺・胆沢」(2004・6・18)によると、以下のように記述されている。

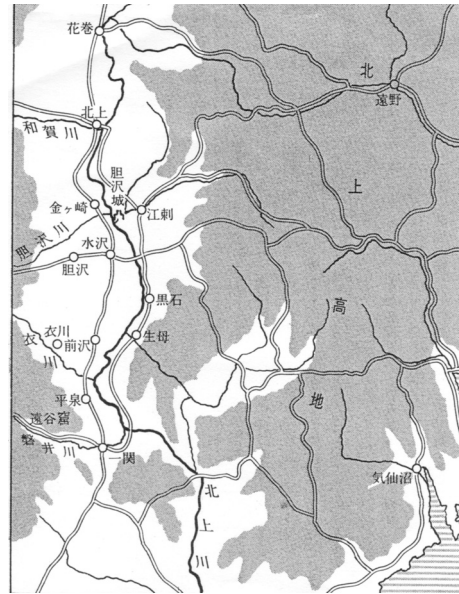
白鳥館遺跡は、白鳥川と合流する北上川に接する段丘上に位置する。平安時代末期の豪族である安倍頼時の八男の白鳥八郎行任の城であるといわれている。安倍氏が前九年合戦(1051～1062年)で源義家に敗れて滅亡した後の室町時代のころには、白鳥氏が居城したとされている。

因みに同町教育委員会は平成16年度は11世紀の遺構の確認を目指して、発掘を行う予定である。

さて、白鳥館の城主、安倍行任(一説には安倍則任)とはどんな人物であったのか、〈白鳥伝説〉と深く関わる部分も有ると思われるので、以下に略述したい。

安倍行任は、奥州奥六郡の俘囚長として、朝廷派遣の陸奥守に帰順していた、安倍頼時の八男(九男とする説もある)で、別称を「白鳥八郎」と云う。1051年からの前九年の役では父頼時、兄貞任に従い、戦功を収めた。しかし、生没年を含めて不明な点も多く、山川出版刊『日本史広辞苑』にも収められていない。また、前述したように、「白鳥八郎」を安倍則任とする説もあり、その実体は謎に包まれている。

さて、話を宮沢賢治に戻すと、賢治の居住地、花巻と前沢町(胆沢郡)は同じ岩手県に属し、その距離は約40キロ、JR東北本線の普通列車で35分という位置関係にある。賢治と胆沢郡との縁は深く、『宮沢賢治語彙辞典』(原子朗編・東京書籍)によると、ここに設置されていた〈臨時緯度観測所〉に賢治はしばしば足を運んでいる。童話『風の又三郎』の中では、主人公の又三郎がこの〈臨時緯度観測所〉について語る場面がある。



北上川・胆沢城周辺

『白鳥伝説』(谷川健一・集英社P362より)

このように賢治にとって胆沢郡一帯は、馴染み深い場所であり、同じ郷土の人間として、「白鳥八郎」について賢治が既知であったことは、疑いのないところであるだろう。また、安倍氏は花巻と隣接する北上市との繋がりも密で、源頼義に急襲された安倍正任が守っていたのは〈黒沢尻の柵〉と呼ばれる軍事拠点である。この場所は、谷川氏の『白鳥伝説』によると現在の北上市黒沢尻町字川岸辺りと推定される。この地点と賢治の生家の有る花巻市豊沢町とは、10数キロしか離れていない。この黒沢尻を舞台に書かれた作品として、文語詩（未定稿）〔二川ここにて会したり〕がある。

（二川ここにて会したり）
 （いな、和賀の川水雪代ふ
 夏油のそのの十なれば
 その川ここに入ると云へ）

藍と雪とのうすけぶり
 つらなる尾根のかなたより
 夏油の川は巖截りて
 ましろき波をながしきぬ

（校本・宮沢賢治全集・第五巻・文語詩 未定稿）

ここで言う「二川」とは、黒沢尻の西で落ち合う、和賀川と夏油川を指し、この二つの川が落ち合う地点は安倍正任が守っていた〈黒沢尻の柵〉とは程近い距離に有る。〈黒沢尻の柵〉は北上川と和賀川とが分岐する地点に比定されているので、辺りの景観は賢治が描いたそれとほぼ一致する。賢治のこの創作意識の根底には〈黒沢尻の柵〉の建っていた風景が潜行する意識としてあったとさえ感じられる。賢治にとって黒沢尻は身近に、安倍氏を実感できる場所として認識されていたと言えるかもしれない。

更に、賢治にとって安倍氏を強く実感できる場所として挙げられるのは、現花巻市鳥谷崎にあったと比定されている〈鶴脛の柵〉である。この〈鶴脛の柵〉があった鳥谷ヶ崎城址は賢治の生家とは目と鼻の先にあり、まさに賢治にとっては、幼少時代の遊び場でもあり、花巻農学校の教師時代には通勤の途中に立ち寄る場所でもあったろう。

この鳥谷ヶ崎城二の丸にある鐘楼跡は通称、〈四っ角山〉と呼ばれ、童話『マリブロンと少

女』の中にも「その城あとのまん中の、小さな四っ角山の上に、めくらぶだうのやぶがあつて」という箇所が登場する。

また、直接、〈鶴脛の柵〉をモチーフにはしていないものの、それを彷彿とさせる作品を賢治が書いているので、ここで取り上げてみたい。それは「館は台地のはななれば」と題する作品である。

館は台地のはななれば
鳥は岬の火とも見つ
香魚釣る人は藪と瀬を
低くすかしてわきまへぬ

鳥をまがへる赤き蛾は
鱗粉きらとうちながし
緑の蝦を潜しつつ
浮塵子あかりをめぐりけり

(校本・宮沢賢治全集第五巻・文語詩 未定稿)

この作品を一読すると、「館」、「台地」等の詩語から、〈白鳥館〉や〈安倍館〉という、安倍氏の居城、もしくは〈黒沢尻の柵〉や〈鶴脛の柵〉を連想できる。加えて、作品の中に二度登場する「鳥」は、前後の詩語との相関から〈白鳥〉を連想するのに十分な条件を満たしているとも言うことができよう。

しかし、この作品は口語詩「来訪」と補完関係にある詩で、「来訪」に描かれている「館」とは、『校本・宮沢賢治全集・第四巻・校異』によると、当時、花巻市下根子桜にあった〈羅須地人協会〉(7)の建物を指す。確かに、決定稿に至る下書きを追うと、〈羅須地人協会〉の建物を、ここで「館」と呼んでいることは明白だが、その描写の下敷きとなったイメージとして、先に挙げた、安倍氏の建造物を置くことは、強ち無理なことではないだろう。

現地に行けば実感できることだが、〈羅須地人協会〉の建物があった、現花巻市桜の、宮沢家の別荘地は、北上川の西に広がる〈賢治自耕田〉辺りから仰ぎ見ると、切り立った断崖を持つ台地のように見え、そこに二階建ての〈羅須地人協会〉の建物(現在は改修され岩手県立花巻農業高校の敷地内に移築)を重ねると、確かに「台地」の上に建つ「館」(柵)のようにも感じられる。この桜の、宮沢家別荘地から、殆ど真北に〈鶴脛の柵〉と呼ばれた、現花巻城址がある。

「館」の火を求めて飛んでくる「鳥」という形象に〈白鳥大明神〉となつた安倍行任（或いは則任）の靈魂を思ったと考えることも可能ではないだろうか。

更に、源頼義の軍に追われた安倍氏はついに鳥谷ヶ崎（花巻）を失い、北上川を北上し、厨川まで退却する。沼館愛三の『南部諸城の研究』（8）によると〈厨川の柵〉は、東を北上川、西を巢子川に挟まれた天然の要塞で、現在でも当時の堀の跡が残り、この地域には〈前九年〉、〈安倍館〉等の地名が残っている。今夏、当地を調査した折に、〈厨川の柵〉があったと思われる辺りに立ち寄ったが、北上川に架かる北大橋と館坂橋の間にあるこの地区は、JR盛岡駅からも比較的、近い場所に位置し、国道46号線が東西を貫き、南北を東北新幹線と、いわて銀河鉄道が通る、交通の要衝である。また、かつては、地形から類推するに北上川だけではなく、多くの小河川が、八つ手のごとく流れていた場所であろう。

しかし、此の天然の要塞も頼義の軍勢には勝てず、安倍貞任は戦死、貞任は安倍行任、則任の兄に当たる。この時の様子を『陸奥話記』（9）は以下のように伝えている。

貞任拔劒斬官軍、官軍以鉾刺之。載於大楯六人舁之將軍之前。其長六尺有余。腰圍七尺四寸。容貌魁偉皮膚肥白也。將軍責罪貞任一面死矣。又斬弟重任 字比浦六郎 但宗任自投深泥逃脱已了。

安倍氏の壮絶な最期を伝える件であるが、この文中に安倍行任の名は見えない。「白鳥館」の件でも消息が分からない、行任という人物は実在したのだろうか。『陸奥話記』の記述を信じるのであれば〈白鳥八郎〉は安倍則任ということになり、〈厨川の柵〉陥落の後、出家して帰降したことになる。

この安倍則任は後に、現在の宮城県白石市、片桐神社と柴田郡村田町の白鳥神社に祀られたと伝える説もあり、この安倍則任こそが〈白鳥大明神〉であり、東北地方一円に語り継がれた〈白鳥伝説〉の中心人物ということになる。（因みにこの宮城県白石市の刈田嶺神社の祭神は、ヤマトタケルであり、刈田嶺神社が〈白鳥神〉を祀っていたという事実は、896年にまで遡ることが可能であるという谷川氏の指摘もある。）

今となつては史実を詳らかにすることはできないが、いづれにしても、安倍氏の誰かが〈白鳥大明神〉として祀られ、その「伝説」が後世まで語り継がれることになったことは、やはり見逃し難い。

宮沢賢治にしてみれば、自分が生まれ育った花巻、そして青年時代を過ごした盛岡、そして、しばしば、足を運んだ胆沢郡や黒沢尻を舞台にした、前九年の役における安倍氏の興亡は、大変な親近感を持って受け入れるべき史実であるだろう。現在のところ、安倍氏について賢治が書き

残したものは明らかにされていないので、断言はしかねるが、賢治の脳裏には「白い鳥」創作時だけに限らず、殆んどアプリオリに近い形で、前九年の役が刷り込まれ、その深層には、安倍氏の興亡と絡む形で〈白鳥八郎〉（白鳥大明神）の形象が存在したのではなかろうか。そうした〈白鳥〉に対する沈潜した思いが、賢治をして、その作品中に度々、〈白鳥〉（鳥）を登場せしめた遠因になっていると考えることはできないだろうか。この点に関しては、この先、フィールドワークを試み、可能な限り、実証してみたいと考えている。

おわりに

本論においては当初、〈白鳥〉をキーワードに、「白い鳥」から「青森挽歌」に至る時期の宮沢賢治の宗教心の変遷を作品解釈を試みながら行う予定であった。しかし、今夏、行った、盛岡、花巻の調査において、安倍一族の当地での興亡の跡が、賢治の作品の舞台となった場所と著しく一致し、また、その興亡の背景に〈白鳥伝説〉が隠されていることに気づき、予定を変更し、賢治の作品に潜む、創作意識を検証することとした。

宮沢賢治が何故、あれ程までに〈白鳥〉に拘泥し、作品の重要箇所において、〈白鳥〉を登場させたのかという疑問は、賢治と向かい合うようになってからの、私自身の大いなる疑問であった。

そうした自分の内なる疑問に、本論がどれ程、応えているかを考えると、恥じ入るしかないが、〈宮沢賢治と民俗学〉というテーマをこれまでの〈宮沢賢治と法華経〉とともに追求したいと考えている、私にとって本論は、新しい研究における里程の最初となりえたように思う。

注

- (1) 『宮沢賢治の文学と法華経』・分銅惇作・水書房・1981年
- (2) 『宮沢賢治「銀河鉄道」への旅』・萩原昌好・河出書房新社・2000年
- (3) 「中日新聞夕刊」・太田昌孝・1996年11月6・7日
- (4) 『年譜 宮沢賢治伝』・堀尾青史・中央公論社・1991年
- (5) 常不軽菩薩（じょうふぎょうぼさつ）・法華経常在不軽菩薩品に説かれる菩薩の名。
- (6) 『白鳥伝説』・谷川健一・集英社・1986年
- (7) 羅須地人協会（らすちじんきょうかい）1926年に宮沢賢治が花巻市下根子桜に開いた農民の為の私塾。
- (8) 『南部諸城の研究』・沼館愛三・伊吉書院・1981年
- (9) 『陸奥話記』・現代思潮社・1982年

参考文献（注に取り上げた分は除く）

- ・ 『宮沢賢治語彙辞典』・原子朗編・東京書籍・1989年
- ・ 日本古典文学全集1『古事記・上代歌謡』・萩原浅男校注・訳・小学館・1973年
- ・ ワイド版 岩波文庫『日本書紀』・坂本太郎他校注・岩波書店・2003年

- ・ 『新仏教辞典』・ 中村元監修・ 誠信書房・ 1962年
- ・ 『古事記物語』・ 鈴木三重吉・ 角川文庫・ 1994年
- ・ 『校本 宮沢賢治全集第 2 卷』・ 筑摩書房・ 1985年
- ・ 『 同第四卷 』
- ・ 『 同第五卷 』
- ・ 『 同第八卷 』
- ・ 『 同第十卷 』
- ・ 『 同第十一卷 』
- ・ 『 同第十四卷 』
- ・ 「日本史辞典」・ 歴史教育研究所編・ 旺文社・ 1978年